

保健室の遊戯

カレイド「城崎天音の憂鬱な一週間」



体験版

* * *

夕刻と呼ぶにはまだ早い、午後の陽射しが揺れる木陰を床に落とす。

わずかに残る消毒薬の匂いが、一層彼女を緊張させているのかもしれない。

レースのカーテンを閉めた私の前で、少女は困惑と緊張の面持ちで、俯きがちにこちらを窺ってくる。

「それで……いつ頃からなのかしら？」

「……………」

僅かに息を呑むような仕草と共に、城崎天音（しろさき・あまね）の表情がぴくりと強張る。不安と緊張に身を竦ませ、小動物のようにおずおずとこちらを窺う——そのしぐさ一つをとっても、少女愛好趣味の人間にはたまらない要素だ。

嗜虐心を掻き立てる少女の反応は、見ているだけでも背筋を震わせる。

「あ……あの……」

白く透けるような肌に、光に透けるような淡いブロンドは、彼女が受け継ぐ欧州の血を色濃く覗かせている。確か、母方の祖母がそちらの出身だという話らしく、彼女本人

も数年前まで海外で暮らしていたらしい。

そんな妖精のような外見にはあまり似合わない野暮ったい眼鏡と、舌足らずな声は、しかし私のような人間にはむしろとても魅力的だ。幼さとあどけなさを併せ持つ、無垢ではかなげな容貌と相まって、むしろ彼女の魅力を引き立てていた。

傾いた陽射しの注がれる保健室の丸椅子の上、天音は俯き、困惑に視線を揺らす。

少女の面持ちには、薄く羞恥が覗いているのが窺えた。他人に『それ』を告げること強く拒絶する意志の働きは、発達段階の途上にある少女が自分の身体に起きている異常——己の変化から目を背けようとするとする自然な反応だ。

明け透けに恥部を口にするこのない育ちの良さと、潔癖な倫理観。なるほど彼女は実に理想的な少女である。

そんな天音を嗜めるように、私は返答を促す。あくまで、職務に忠実な養護教諭を装って。

「黙っていても分からないわ。ちゃんと教えてくれないと、なにも出来ないわよ？」

「……………」

つとめて事務的な口調は、彼女の羞恥を煽るためのものだ。予想通り、天音はなおも口籠る。しかし、いくら目を逸らそうとしても、この哀れな少女が自身の身体に起きて

いる事象から逃れることはかなわないのだ。

天音の手のひらが無意識のうちに、そっと制服の上から下腹部を撫でるのを、私は見逃さない。

「え……えっと、……ふ、二日……」

顔を赤らめながら、少女が応える。眼鏡のフレームに触れながらの返答は、心理的なブロック——彼女が都合の悪い答えをごまかしていることを示している。

「ウソはダメよ。きちんと本当のことを教えて頂戴。正しい治療ができないと、あなただって苦しいままよ？」

「っ……よ、四日……デス……っ」

多少、声音を強めて言うのと、耳まで赤くなりながら、少女はとうとうそのあどけない唇を歪めて、ご無沙汰となった『お通じ』の日にちを口にした。

四日、という言葉の重みを噛み締めながら、私は天音の制服の腹部へと視線を向ける。

恐らく本人も意識しているわけではないのだろう、白魚のような小さな手のひらが、紺の制服の上から、細い下腹部をしっかりと押さえこんでいる。

本能的な恐怖——そして屈辱に近い煩悶。自らの身体を蝕む『体調の不備』が、天音にとってどれだけ重いものであるのかを指し示していた。

城崎天音——〇等部の〇一C、出席番号9。成績、素行共に良好。委員会所属等は無し。部活動は合唱部に所属し、その歌声と技量から全国区でも名のある大会で好成績を残す。

欧州の血を交えているというその出自や、帰国子女という特殊な事情。それに違わぬ高貴さを思わせるその容貌から、天使の歌声などという綽名をもち、同じ学年はおろか中等部、高等部、果ては付属大学にまで名を知っている者も多いとびきりの美少女。

そんな彼女が抱える悩みが、極度の便秘症であるというのは、実に因果な話であろう。実際私も、今日相談を受けるまではまさかと考えることもしていなかった。

——文字通り、本当の天使か何かではないかと錯覚してしまうほどに、彼女は俗世の不浄とは無縁の存在に思っていたのだ。

だが、天音とて年頃の、他の生徒と同じ、思春期を迎えたばかりの少女なのである。その事実を思い知らされ、私は強い衝撃を受けるとともに、かつてない絶好の機会が訪れたことに歓喜していた。

私のような少女愛好者にとって、女子校の養護教諭という職はまさに天職であろう。

思春期を迎えた少女が抱えるとおきの秘密——無自覚ながらも異性の目を気にし始めるこの年頃の少女達はひとときわ羞恥心に過敏である。

未分化な性の密やかな目覚めと共に、彼女断ちは皆、人には決して言えない恥ずかしい秘密を抱えているものだ。芽生えかけた性に興味を持ちながら、同時にそれらを激しく忌避する、潔癖な理性も併せ持つ。

そんなアンビヴァレンツな年代の少女達と、世間から切り離された保健室という特別の領域で、二人きりで向き合って、とっておきの秘密を共有する——この特権を知ってしまえば、もう他の生活には戻れない。

「そう……じゃあ、おなか診せてくれる？」

「っ……」

適当なことをカルテに書き殴り、私は天音に次の指示を出す。少女が小さく肩を跳ねさせたのを無論見逃すことはない。

四日もお通じがないという事実には、どのような処方を実施されるのか——そんな不安と困惑をぎゅうと胸の内に抱えているのだろう。自分の身体の不調を告白させられたことで、その羞恥はさらに増しているに違いなかった。

しかし、この部屋において白衣を纏う私の言葉は絶対的な権能を有する。少女達に抗うことは許されない。

多くの少女と同じように、天音にとってこの保健室という場所は完全な異邦、普段の

生活圏とは切り離された特異な空間である。そこでは彼女達は孤独であり、すべての支配権はこの部屋の主である私にあるのだ。

いちどはぎゅっと俯き身体を小さくしていた天音だが、やがて観念したかのように、サマーベストをめくると、そっと制服のブラウスのボタンを外した。

天音のアンダーウェアは〇〇らしいスポーツブラなどではなく、古式ゆかしくも格調高いシルクのキャミソール。恐らくまだその必要のないささやかな胸の隆起が、慎ましやかなその先端までを覗かせる。下着を身に着けることを恥ずかしいと感じている一方で、芽生えかけた性への意識が何も着けずにいることを不安と感じているのだろう。

敏感な肢体をやさしく包み込み保護するその薄い布地が、少女自身の手によって持ち上げられてゆく。

薄い青の淡い色合いの下着の内側に、まるで雪のような真っ白な肌があらわになる。なだらかな腹部が、可愛らしいおへソをのぞかせていた。

「あら、城崎さん、まだブラジャー着けてないの？」

「っ、は、はい……」

「もう〇年生でしょう？ 嫌がっていちちゃだめよ。きちんと身体の成長に合わせなきゃいけないわ。……ほら、もっと上まで見せなさい」

「は、はいっ……」

わざと心配するふりをして、さりげなく羞恥を煽る。案の定天音は真っ赤になりながらも、震える指先でそれに応じる。

どうやら、天音は自分の未発達な身体にコンプレックスを抱いているらしい。ならばそこをつつかない手は無かった。

実際のところ、保護という意味合い以外では天音にブラの心配は無用だった。同年代の生徒にはすっかり発育良く胸のふくらみを見せる少女も少なくないのだが、たしかにキャミソールの下にはほんのわずか覗く、ささやかな胸のふくらみでは、確かに下着は不要だろう。

しかし、ほとんど起伏のないその胸から腰までのラインは、触れることすらためらわせるような黄金律を持って存在し、天使の歌声を持つ少女の神秘性をいっそう確かに物にしているように思えた。

それらについてもじっくりと堪能したい気持ちもあつたが、今はさらに優先すべき項目がある。私はそつと剥き出しになった天音の白い腹部に手を触れさせた。

「あ……っ……」

「動かないで。ちゃんと診てみないと具合が分からないわ」

逃げようと、丸椅子の上で身体をよじらせる天音の動きを封じ、小さなおなかをぐつと押しこむ。普通ならほどよい柔らかな弾力を見せて沈みこむはずの指先が、硬いものに押し返される感触があった。

「うあ、っ……」

ほんの少し指先を押し込んだだけで、天音は咳こむように息を荒げ、呻いたかと思うと、強く両足を椅子の下でばたつかせ始める。

「っ……せ、先生……苦しい、デス……」

「そうなの？ ……これは？」

「ひあああっ!? だ、ダメ……っ、お、おなか……、いたい……」

指の位置をずらすと、さらに天音は過剰に反応した。

どうやら天音の告白に嘘はないようだった。白く小さな腹部の奥に硬く詰まった手応えは、薄い肉付きの下に押し込められた、硬くみっちり押し固められた異物の感触を、はつきりと知らせている。

悶える少女に興奮を覚えつつ、私は診療を装ってさらに別の場所を刺激する。無遠慮な指先に、天音はさらに目を細め切なげに喘ぎ、激しく身体をよじらせた。

「我慢なさい。これも苦しい？」

「だ、ダメえ……っや、やめてえ……っ、お、お願い、しマス……っ!!」
ほとんど涙声の懇願に、私の嗜虐心も煽られる。

触診を装って執拗に無垢な身体を弄ぶこと、およそ5分。

ようやく手を離してやると、天音は大きく息をつきながらがっくりと肩を落とした。
見た目以上に体力の無い子のようにだった。歌唱には腹筋も必要だし、文科系の部活の中
でもとりわけ体力を使うはずなのだが、どうも天音は運動の類は苦手であるらしい。

また、それは同時に、今回の便秘がどれだけ少女にとって重荷であるのかも知らせて
いた。

「はあっ……はあっ……っく」

「かなり、ね……」

息を荒げ、涙を浮かべる天音の目の前で、私はわざと聞こえるように独白し、深刻な
表情を浮かべてカルテに何事かを適当に書き殴る。

養護教諭がそこまで専門的な技術を持っている必要は必ずしもなく、私もほとんどそ
んな知識はないのだが、こんな陳腐な演技でも、白衣と保健室という立地の中では疑い
の余地を挟ませず、少女の不安感を煽るのには効果的なのだ。

無論、なにがいけないのか分かるわけもない天音は、いまにも泣き崩れそうな不安げ

な表情で、太めの眉を下げ、縋りつくような視線で私を見上げてくる。

「っ、先生……、っ」

「ねえ城崎さん、本当のことを教えて頂戴？ 本当に、最後にお通じがあつたのは3日前なのね？」

念を押すように、天音の顔をまっすぐ覗き込んだ。

はつきりとした根拠があつたわけではないが、少女が嘘をついていることを私は半ば確信していた。偽りではないが、真実全てを口にしたわけではない。罪を告解する子羊が、主の下されんとする罰を恐れ、必死に己の保身を望んでしまう——そんな心境だろう。

私に専門的な技術などはないが、おおよそ、思春期のガラスのように繊細な羞恥心を持つ年代の少女達は、排泄に関して殊更控えめな報告をすることは、経験として十分に理解している。天音もまたそんなタイプの少女だということはいまさら確認するまでもない。

「ごめん、ナサイ……、せ、先生……おネガイ……助けて……」

案の定。ぼろぼろと涙をこぼし、天音は虚偽の告白をしていたことを詫びはじめた。

レンズの内側に落ちる水滴が、いつそう無力な少女の存在を強調し、ますます私の嗜

虐心をかきたてる。

ことさらに真剣ぶる私の態度に、天音は左右の手を下腹部を撫でさするように重ね、まるでこの世の終わりのような細かい声で喘いだ。

「ほ、ホントは……もう、一週間も、出てないんデス……っ」

「……そう」

一週間。

その時間の単位には、さすがに私も絶句していた。

せいぜいあと1日といったところだろうと思っていたが、なんと、この可憐な美少女はもう一週間も、排泄をしていないという。比喩抜きで掌に乗ってしまいそうな、小柄で若い少女が、汚らしく腐敗し、水分を吸われて硬く詰まった食物のなれの果てを、あどけない腸粘膜の内側にぎっしりと詰め込んでいるというのだ。

——一週間、つまり7日間。父なる神が天地を創造し、そして休まれた安息日を含めたのと同じだけの日数の間、天音が口にしたものはすべて、彼女の小さなおなかの中に遺されたままなのである。

「本当に？」

「は、はい……ッ」

「何も出てないの？」

「……………っ、」

さすがに信じられずに、私はいくらか下心を混めた露骨な問いを重ねてみる。養護教諭とそこを訪れた生徒、という関係でなければまず許されない破廉恥な質問に、天音の唇は固く結ばれる。

しかしそれを差し引いても少々あからさま過ぎたか、と軽く後悔した瞬間、天音は頬を赤くしながら、たどたどしく言葉を選んで話し出した。

「お……………おなら……………は、ときどき、……………出てる、ん、デス……………けどっ」

「けれど？」

「う……………ウンチ……………が……………っ……………でない、デス……………っ」

愛くるしい容貌と無垢な性格に違わぬ、天使のように愛らしい少女の唇から、汚らわしい排泄物の名称が立て続けに飛びだしてくる。鈴を転がすような声が、震えながら下卑た排泄物の名を告げる——それも、私のためだけに。そのことだけですら、偉業と呼んで差し支えない。

途方も無い背徳感が込み上げてくる。私は口元に浮かびそうになる笑みを抑えこむのに多大な労力を支払わねばならなかった。

「……そう」

ひとり頷いて、ほくそ笑む顔を見られないように、シャツを持ち上げたまま律儀に維持している天音の下腹部へと、もう一度手を伸ばした。形の良い臍を小指の端で軽くなぞり、指の腹で硬く張りつめた白い肌の弾力を楽しむ。

それだけで、天音は大きく息を荒げ、頬を染めて肩を上下させていた。

彼女の言葉に嘘がなければ、天音はこの小さな口で精一杯噛み砕いて飲みこんだ食物を、一週間に渡っておなかの中に閉じこめていることになる。

となれば、それはそれは、さぞかし強烈なことになっているだろう。

羞恥に小さくしゃくりあげる、眼鏡をずらして目をぬぐる少女を見下ろしながら、私は夢想する。この愛くるしい無垢な少女が、スカートと下着に守られた秘所を押し広げ、小さく折りたたまれた排泄粘膜をおおきく裏返らせて、水分を吸われ腹腔にみちみちと硬く詰まった汚辱の塊をどのように吐き出し、惨めな音をたてて孔をひしゃげさせるのかを。

その瞬間が間近に迫っていることを思うと、ぞくぞくと背中を這い登る嗜虐心に震えそうになるのを堪えるのが難しくさえあった。

だからこそ、ここで判断を誤る訳にはいかない。慎重に表情を作り——親身になって

生徒の相談に応じる、理想的な養護教諭として、天音に接する。

「教えてくれてありがとう。大丈夫よ。安心して、城崎さん」

「え……ほ、本当、デスカ?!」

だが、警戒も杞憂だったようだ。自分の身体に訪れた異状を回復する手段があることを聞き、天音はぱあつと顔を輝かせる。

「ええ、少し苦しいかもしれないけど——すぐに治してあげる。なんだったら今からでも構わないけれど——」

「……は、はい!!」

一刻も早く、自分を責め苛む汚辱と離れたいのだろう。私が問うよりも先に、天音は何度も力強く頷いた。藁にもすがる思いなのが一目でわかる。ずっと思い悩んでいた秘密を口にしたことで、共犯者を得たような——あるいは、すでに半ば赦しを得たような心境でいるのだろうか。

言葉にすれば単なる体調不良だが、繊細な天音の心はこの重荷にずっと責め苛まれてきたに違いなかった。

この純粹無垢であどけない少女の、表情が、これからどうやって恥辱に歪んでゆくのか——想像するだけで胸が高鳴る。

「そう。……でも、治療には少し時間がかかるわ。今日は遅くなっても平気？」

「えっと……大丈夫、デス。部活もありマスから……」

「それと、ちょっと苦しいかもしれないけど、我慢できる？」

「はい！ 大丈夫デスっ!!」

一応念を押してはいるけれど、先生はできるだけ苦しくないようにしてくれるのだから、と、私を心の底から信じこんでいる台詞。

もはや、自分を襲う汚辱から逃げ出したい一心なのだろう。疑うことを知らない無垢な少女は、こうして悪魔の契約書に知らずサインを済ませてゆく。

「先生、……は……恥ずかしい、デス……っ」

「我慢なさい。約束したでしょう？」

「で、デモ……っ」

舌つたらずな声で、天音が訴える。澄んだ声には困惑の音色が混じり、さらに少ない羞恥がそれを彩っていた。

少女の反応はもつともだった。今の天音の格好は、思春期の少女にとっては何と云治療のためのものだとしても、簡単に許容できるものではない。

私は天音に下半身のものを全て脱ぎ、ベッドの上に乗るように指示をした。さらにそのままうつ伏せになって、お尻を高く突き上げた姿勢を取らせる。既にこの時点で真つ当な治療にはまずありえない格好なのだが、そんな事を
少女が知る筈もない。

天音の服装と言えば上半身だけ制服のまま、下半身に身に付けたのは短い靴下だけ。口には出さずともその異常性は天音も感じ取っているようで、普通に服を脱ぐよりもより一層羞恥を覚えるようだった。

私に背中を向ける体勢で、突き上げた腰——細い太腿の付け根では、まだ無垢な割れ目が乱れもない一本のたて筋を描き、下腹部の丘にはほんのわずか、ほんのりと翳る小さな淡い草むらが見て取れる。産毛のような色合いの慎ましやかな茂みは、少女の髪色と同じ淡い枯れ草色だ。

そして——胸の薄い肉付きとは対照的に、ふつくらとした張りのある白い双丘の谷間では、少女の汚辱を詰め込んだ腹腔の出口である小さなすぼまりが、乙女の貞淑さでちよこんと畏まっていた。

「せ、先生……っ」

縫るように、少女は声を絞りだす。少女として、秘めておかねばならない場所を、残らずすべて私の前にさらけ出して、天音も流石に強い抵抗を覚えているらしい。

少女とは言え、本来は決して見られてはいけない部分までが照明の下、遮るものなく晒されていることには本能的に危機を感じているのかもしれない。

だが、これから企んでいることの意図などおくびにも出さず、私は冷静な養護教諭を演じる。

「ちゃんと見えないと処置ができないのよ。治りたくないのなら構わないけれど？」

「っ……、こ、このままじゃ……嫌デス……」

「なら、ちゃんとできるわね？」

背中越しに天音の顔を覗き込み、語気を強める。ひくっ、と喉を震わせ、それでも少女は健気にうなずいた。

「は、はい……」

「じゃあ、じつとしていてね」

言い聞かせるように少女の頭を撫で、少女の背後に回り込む。

天音の身体は、美しかった。

欧州に続く名家の血を受け継ぎながら、まだ二次性徴を迎えていないならかな身体
のラインは、触れることもためらわせるように華奢で、手足はまるで人形のように細く、
それでいて均整のとれたバランスを奇跡的なまでに保っている。

軽く爪でなぞるだけで身を竦ませるほどに敏感な肌は、陶磁器を思わせる乳白色の色
合いに透き通り、爪先やかかとまで形よくなだらかだ。

天上の歌を奏でるため、神に愛され選び抜かれた肢体——まさしく理想的な少女性愛
の対象となりえた。私のような好みの人間にとっては、至高の芸術品、と評してすら生
温い。

うつ伏せにさせられたまま、制服のブラウスの合間から覗くわずかに膨らんだ胸は、
その先端の突起をほんのりと桜色に染めている。屈辱と羞恥に頬を染め、うなじにしつ
とりと汗をかくそのさまは、ぞくぞくと私の嗜虐心を刺激し、無残に引き裂かれた姿を
想起させる。

少女らしいほっそりとした腰の奥に続く、健康的な性器の美しさには、思わず感嘆の
ため息すら零れた。

「……………」

「あ、あノ、先生……………?」

しかし。天音の身体の中でもとくに特筆すべきは、その排泄孔だろう。

色素の薄いクォーターの少女のためか、白い肌間にひっそりと息づく小さなすぼまりは、まったく汚らわしさを感じさせない、ほのかな薄紅色をしているのみだった。髣も細く小刻みに寄せあわされ、きゅっと閉じるように軽く上を向いて慎ましやかに澄まし顔をしている。無論、こちらにはわずかな産毛も見当たらない。

まさに、天使の名を関するに相応しい、俗世の穢れとは無縁だと思わせるような姿だった。

一体、天音のこの姿を目にして、この奥に一週間にも及ぶ排泄物が、ぎっちり押し固められ、腐敗したガスと共にみちみちと詰まりきっていると、誰が想像できるだろう？
そう。いかに美しく愛くるしくとも、彼女も他の生徒と同じように呼吸し、睡眠し、食事をする。いまやその成れの果てである腐敗した汚辱の塊が、端の閉じられた消化管をばんばんに膨らませている。

それをこれから、外に押し出させてやるのだ。

「力を抜きなさい」

「ふあ……!?!」

短く言い捨てて、私は天音の小さなすぼまりをなぞり上げる。思っていたよりも少女

の体温は高く、指先にじんと熱い刺激が響く。

産毛すらないつややかな柔肌の隙間に息づく神秘の孔は、腰を震わせる少女の悲鳴に合わせ、萎縮してきゆうきゆうとはしたなく蠢いた。

「っ、やだ……先生、そ、そんな、トコ……き、汚いデス……っ」

「嫌がっていたら治らないわよ。おとなしくしていなさい」

「で、デモ……っ、ワタシ……っ」

現状を治療するためには『そこ』に処置を施さねばならないことは、少し考えれば自明のことだ。しかし頭では理解できている、嫌悪感は拭えていないらしい。反射的に逃れようとする少女の身体を抑えこみ、私は薄い樹脂の手袋を嵌め、再度指先で執拗に触診を繰り返す。

問診で確かめた通り、天音のそこは確かにここ一週間、使用された形跡がないようだった。まるでもともとそんな事はしないのだとでも言いたげに、硬く閉じ合わさって硬直している。

軽く押しこむその反動だけで、内部の粘膜が小さく縮こまり、なまやかな事ではその内側に詰まった汚辱を吐き出せるようには見えなかった。

「……まずは、少し柔らかくしてあげないとダメかしらね」

「え……?」

呆けたような声を上げる天音に聞こえるように眩き、私は傍らの机からクリームを取り、薄いゴムの手袋の指先にたつぷりと掬い上げる。

にちゆり。突然ちいさな孔にと白いクリームの塗りつけられ、天音はたまらずに甲高い悲鳴を上げる。

「や、やあ……ッ!? せ、先生……何、シテ……!? だ、ダメ、へ、ヘンなコト、しナイで……っ、き、キモチ悪いデス……っ!!」

「大丈夫。ただのクリームよ。マッサージをしてあげてるだけ。……このままじゃ、無理に出させてもおしりが裂けちゃうでしょう?」

「っ……」

裂ける、という言葉に反応したか、天音は言葉を失った。その表情は羞恥が七分に恐怖が三分と言ったところだ。

どうやら、彼女は私の言う治療、という言葉の意味をやつと悟ったらしい。やはりこのような行為、モノとは無縁に育ってきたのだろう。純粹無垢な少女の心が、耐えきれない被虐にゆっくりと歪んでゆく様がありありと手に取れる。

「あ、ア……アア……」

か細い声で、天音は恐怖から逃れんとするように、ベッドの上にあった枕を抱え込んだ。

白いカバーに爪を立てるようにきつく握り、ばくばくとくちびるを丸く開き、耳をくすぐるような心地よい喘ぎをこぼす。緊張に震え、羞恥に染まる頬が、無垢な少女が初めて経験する感覚をはつきりと知らせていた。実に理想的な反応だ。

私は二本の指を使って、何度もクリームを掬いあげては、少女の後ろ孔——括約筋のある孔部を中心に、尻肉全体へと塗りこめてゆく。特に排泄孔には丹念に、少女の細い襞の隙間の一本一本に、しっかりとクリームを塗りつけ、適度に力を込めながら押し伸ばす。

やがて、じんわりと熱を帯びた少女の尻肉は薄く汗をかき、とろけるように柔らかさを増してゆく。ごくごく弱い筋弛緩作用のある成分が効果を発揮し始めたのだ。

「ん、ウ……っつ」

わずかに天音の喘ぎに、甘い色が混じり始めるのを見計らって、緊張と潔癖感に強張った少女のすぼまりを指の腹で押し込むように何度も刺激し、こねほぐしてゆく。

そこが本来の用途であるモノの出入りを可能にする孔であることを、少女の身体自身に思い出させるように。

くち、と押しこんだ指先が、硬く閉ざされていたドーナツ状の括約筋を押し広げ、小さな輪をつくる。

「あふあ……うッ」

ぬめるクリームの刺激は、少女の硬直した身体をゆるやかにほぐし、直接天音の身体を蕩けさせる。直腸粘膜を弄り回させる未知の感覚に、少女は何度も声を上げた。

やがて、繰り返される刺激にふくりと盛り上がった小孔が、わずかに襞を折り返し、指の先端をゆつくりと飲み込んでゆく。

「っ、や、やあ……先生ッ……お、おしり……っ、だめ、痛……裂けちゃう、デス……っ」

「すぐに馴染むわ。緊張せずに力を抜いて」
体内に異物が侵入しようとする感覚に、身体をよじり逃れようとする天音を抑え付け、指の挿入を早めた。指の第一関節——わずか半センチほどの前後運動ですら、天音には身体を引き裂くほどの衝撃に感じるらしい。なるほど確かに、すでに彼女の排泄器官はその本来の役目を忘れて久しいようだった。

ドーナツ状の括約筋を、クリームと潤み始めた粘膜の助けを借りてくぐり抜けた指を前後に揺らしながら、ゆつくりと抜き差しを繰り返す。ぬぷ、ちゅぷ、といやらしい音を立て始めた少女の小孔が、天使の喉が奏でる喘ぎを彩り、放課後の保健室に淫らなり

ズムを奏でてゆく。

ほんのわずか、膨らんだ粘膜に埋め込まれた指先を、ぐるりと小さくねじるように回転させ、引き抜く。ちゅぷりと糸を引く粘液は、少女の孔を濡らすものがクリーム以外の潤滑液を分泌し始めた証拠だ。

細く狭まっていた褌がゆっくりとこじ開けられるに連れて、天音の紅潮は頬から首筋へと拡がってゆく。しっとり汗を浮かばせた背中が、ブラウスの下のシャツを湿らせる。

「あ、はア、せ、先生っ……や、なんか、ヘン、なカンジ……っ」

若いなりに、天音もベッドの上で絡みあうということの禁忌性のようなものは感じているようだった。込み上げる感覚を持って余すように、少女はなんども首を振って拒絶の意志を伝えようとする。

私もつい我慢がきかなくなって、そんな少女の、すでに先端まで真っ赤になった耳朶を、そっと食んだ。

「あああうあ……ッ!？」

ささいな刺激は、けれど経験のない少女にはあまりにも大きな衝撃だったらしい。大きく背中を仰げ反らせ、ぶるぶると背中を波打たせる。

そうして気付けば、人差し指は半分ほどまで天音の体内に埋まっていた。ゆっくりとそれを引き抜くと、少女は細い背中をがくがくと振るわせ、甘く腰を揺する。

ぬめりを伴って抜かれた指の先、指の太さに拡張された天音の排泄孔は、くふりと小さな肉の輪のカタチに広がっていた。

* * *

「こんなものでいいかしらね」

「……あ、つつ、ふう……ふう……」

汗ばんだ胸を上下させ、浮いていた腰をがくりとベッドの上に落とし、天音は荒い息を繰り返した。やっと解放された事への安堵からか、すっかり緊張を解いて脱力していた。

「先生……?」

硬く張り詰めていた下腹部を擬似的にほぐされ、熱を帯びるまでマッサージをされて、いくらかの余裕を得た天音は上半身を起こしてこちらを窺う。

さあ、これでおしまい——と、私が笑顔で言うのを期待しているのが手に取るように

分かった。恐らく、今も軽い排泄欲求を覚えているに違いない。血行の良くなった下腹部に、直接刺激された排泄器官。この程度の刺激でも、長期間の便秘に、忘れていた機能を取り戻すきっかけには十分だ。

だが。私は無論の事、この程度で彼女を解放するつもりはなかった。

「まだ動いちやダメよ、これからお薬を入れてあげるから」

「おクスリ……デスか？」

ぼんやりとした口調で、天音。

予想通り、強い抵抗はない。今の言葉で彼女が想像したのは恐らく飲み薬なのだろう。医療経験の少ない○学生なら、薬と言えば経口摂取する錠剤か液剤、せいぜいが粉末状のものがほとんどだ。しかし即効性の薄いそんなものを用いるほど悠長に事を構えるつもりはないし、なによりも私の興味が満足しない。

私は手早くチュエストを引き寄せ、引き出しに常備してある薬剤の瓶とガラスの注入器を取りだした。瓶の中身の、ほんのりと薄桃色に色づいた透明の薬液をピーカーに開け、四倍に希釈し攪拌する。

この作業は急ぐ必要があった。いかにもな『注射器』を連想させるガラスの容器をはつきり見られては、天音の抵抗を招く恐れがある。せつかくほぐした排泄孔も緊張に引

きつり、硬直した直腸はほとんど薬液を受け入れない。それでは特性の薬液も、思うような効果を發揮できないだろう。

そして、恐怖によって少女たちの口を封じるのはリスクが高いことを、私は過去の経験から嫌と言うほど思い知っていた。だから、私は注入器をブーカーに差し入れ、勢いよくシリンジを引く。きゅぽ、と小さな音を立て、注入器には二〇〇mlの薄赤い透明薬液が満たされる。

シリンジを弄ってわずかな水滴と共に先端の空気を抜き、私は注入器の先端を、クリムに塗れたままの天音の排泄孔に押しつけた。

「ふあ!？」

くに、と。ほんのりと色づいて盛り上がっていた排泄孔は、細いガラスの吸い口をすんなりと飲みこんだ。指に比べれば細いとはいえ、冷たい異物が体内に侵入する感覚に、繊細な少女の身体が小さく震える。

背筋をぞつと粟立たせながら、天音はベッドの上でうつ伏せになったままもがき、ガラスの嘴から逃れようとする。

「あく……や、やアアっ!？」

しかし、その一方で天音の排泄孔はドーナツ状にぷっくりと膨らみ、小さなガラスの

管をきゅつとくわえ込んでいる。軽く注入器を動かしてやると、そこは綺麗な肉色をわずかに覗かせながら、透明な粘液で吸い口を濡らした。

どうやら、すでに注入の準備は整っているようだ。にんまりと口元に込み上げる笑みを必死に押さえ込みながら、私は注入器のピストンに手をかける。さりげなく、体重を寄せて少女の逃走を防ぐことも忘れない。

「さあ、おクスリを中に入れるわ。力を抜きなさい？」

「せ、先生……や、おしり、ヘンなのが……入ってる、デスっ……!？」

「ふふ、大丈夫、すぐに慣れるわ」

天音の身体が十分な拒絶反応を示せずにいるうちに、私はぐつとピストンに力を籠める。ガラス容器に溜まる薄赤い薬液が、わずかに混ざった空気と共に震えた。

ぷじゆるるるつと音を立てながら、薬液は少女の体内へと送りこまれてゆく。

「ふああアアアッ!？」

天音が甲高い悲鳴を上げる。思わず眉をひそめるほどの音量は、なるほど確かに合唱部でも人气的的となる、澁みなく澄んだ美しい声だ。まさに、絹を裂く悲鳴、という表現が相応しい。

この保健室は防音であるから良いようなものの、ほかの部屋でならばたちまち誰かが

かけつけてくることだろう。

だからこそ——私は誰にも邪魔されぬまま、この可憐な少女を思うさま虐待することができるのだが。

「や、やアア!? な、お、おナカ……おしり、へんなの、入ってッ……だ、ダメえ、だめデスっ、先生、……ワタシのおシリ、へんなの入れないでエ……ッ!!」

そんな天使もかくやという可憐な声を、苦悶と苦痛に歪ませて、少女は涙を滲ませ必死に訴える。しかし無常にも、彼女にさらなる苦痛をもたらす悪魔の薬液は、容赦なく腹腔へと注ぎ込まれてゆくのだ。

ゆっくりと進んでゆくピストンのゲージは、既にシリンジに吸い上げた薬液の三分の一ほどが天音の腸内へと送り込まれたことを示していた。少女の下腹部が怖気立ち、小さな唸りを響かせるのを私は聞き逃さない。

この瞬間はまさに、私にとつての擬似的な射精に等しい瞬間だ。できるだけ長引かせ、少女の反応を楽しむため、焦らすようにゆっくりと、ピストンを押し込んでゆく。

「あ、くウツ……ヤダあ……センセえ……っ」

短い髪を振り立て、じつとりと汗に湿る背中をくねらせて、天音は必死に助けを求めらる。

滑稽なものだ。この上なお、彼女はその身を襲う苦しみから逃れようと、当事者の私に縫ううとしていた。そんな少女の小さな下腹部の中に、下品な音を立てて薬液が溶け込んでゆく。深く折り返された腸粘膜を満たし、じんわりと、しかし素早く吸収されて効果を發揮する。

数々の実験で突き止めた薬剤の配合は、少女にとってもっとも負担をかけず、かつ最適に羞恥を煽って排泄衝動を与えるように調合してある。

だが今回は、あまりにも長い間本来の機能を忘れてしまった天音の排泄器官を叩き起こすのが目的なのだから、時間を調節し、少女の身体をコントロールしてやる必要があった。

ぐりゆるるるううッ……

「や、やあああ…ッ!？」

薬液の注入がさらに半分、三分の二を過ぎたころ、不意に鈍く響いた腹音に、天音は顔を真っ赤にして枕に押しつけた。これまでも感じていただろう下腹部のうねりが、はつきりと解るほどの異音になって響いたのだ。ことさらに強い羞恥心を持つ少女の年代

にとつて、それは死ぬのにも近い恥辱だろう。

ごぼ……ぎゆるるるぐりゅッ、ごぼぼッ……

もともと限界近くまで中身を詰め込んでいた直腸に、さらに100mlを超える薬液を一気に注入され、反射刺激で腸の蠕動が活発化したのだ。液体と気体が混じりあい、活性化された腸粘膜を激しく刺激して、少女の下腹部が下品極まりない排泄の予兆にうねる。

空腹の腹音とは明らかに違う、もっと身体の下、底からうねり響く下品で恥辱極まりない音。我慢できないトイレの予兆である。

すっかり機能を停止していた排泄器官の奥に圧縮されていたガスが、薬液の助けを借りて滑らかに動き暴れる。うねる腸管は蠕動を繰り返し、直腸までごぼりと湧きあがっては少女の我慢によって再び腹奥へと押し込められてゆく。

これによって、天音の直腸は蠕動を再開させた。

あとは数分もしないうちに、これまで天音の腹奥にぎっちり詰まった固形の物体にまでその震動が到達してゆくことだろう。

そしてとうとう天音も、はつきりと排泄欲求を自覚しようだった。

「や、やだ……先生っ、離して、くだサイッ……あ、あの、ワタシ……っ」

ふかふかとガラスの管に貫かれながら、天音はお尻をもじつかせ、左右に腰を揺する。きゆうとガラスの嘴を啜えこんだ後ろ孔がヒクつき、ふるふると震えてはきつく締め上げられる。汗を浮かべて引きつる下腹部は、緊張と不安に強張り、はつきりとトイレへの欲求を覗かせていた。

透明な管を深々とくわえ込む、少女の排泄孔は、その奥にピンク色の括約粘膜を覗かせていた。先程までの憤ましやかなたたずまいを崩し、ぷくりと盛り上がって、その内側に抱え込んだ汚辱の塊を押し出すための『おちよほ口』の姿を取りつつあった。

腹奥へと繋がる小孔はすぼまっては緊張と弛緩を繰り返し、細かな排泄欲求を飲み下しているのが手にとるように窺える。

「どうしたの？ まだおクスリ、残ってるわよ」

「ち、違うデス……あ、あのっ……くうウツ」

「動いちゃダメよ、ちゃんと入らないわ。お腹がいたいのが治らないわよ？」

あえぐ天音を見て笑いたくなるのをこらえ、務めて事務的な口調で告げる。こうすることにより一層、天音の罪悪感と羞恥心を煽ってやるのだ。

ピストンに力を籠め、軽く前後させると、腸内を満たす薬液がぐじゅぐじゅとかき混ぜられ、天音はまたも鋭い悲鳴を上げた。

「や、やあ……!! せ、センセえ……っ、ダメ、っ、……お、……っ」

少女の小さなくちびるが、わずかに震え、ついにその言葉を紡ぎだした。

「お……トイレ………行きたい、デス……っ」

トイレ。——排泄。

唸る下腹を抱え、暴力的な腸内の衝動を堪えながら、必死に訴えるその視線に、私の背筋にぞくぞくと嗜虐的な快感が走る。下半身になにも纏わぬ裸体を惜しげもなく晒し、排泄を訴えて涙を浮かべてあえぐ少女の姿。……これにまさる美しいものなど、この世にない。

だが、これからだ。

私の趣味は、この程度の嗜虐ではまるで満足しない。愉悦をおさえ、強い口調で天音に告げる。

「ダメよ、ちゃんとおクスリが入るまで我慢しなさい」

「っ。やあ、ヤアア!! も、もう無理デスッ!! お、おナカっ……もうおクスリ、いいデスっ……!! も、もお、おトイレ………ええッ!!」

喚く天音を押さえ付け、私は強引に、ぐいとピストンをねじり押す。

注入器に用意した総量二〇〇mlの薄赤い溶液、その残り四分の一、五〇mlがみるみる少女の身体の中に吸いこまれていった。ぶちゆる、と腸奥に吹き上がる特性薬液の衝撃に、抗議の声も悲鳴も塗りつぶされて、天音は声を一オクターブ跳ねさせた。

同時に凄まじい排泄欲求が少女に襲いかかる。薬液が本来の効果を發揮するにはまだ早い。強引に異物が腸管に流れ込んできたことによる拒絶反応だろう。

下半身に吹き荒れる猛烈な衝動をこらえるのに精一杯のようで、天音はベッドの上で暴れはじめた。あまりに激しい少女の反応に、私は下着が濡れる感触を覚えていた。

「あああ、アアアアッ!？」

ぷちゆるるる……っ

シリンジの最後のひと押しを終えて、ついに少女への浣腸は完了した。少女はついに、悪魔の薬液、全量二〇〇mlをその体内に受け入れてしまったのである。

【奥付】

「保健室の遊戯 体験版

カルテ 01 城崎天音の憂鬱な一週間」

発行：平成 24 年 1 月 20 日

制作：良い子の諸君！

※作中の登場人物、組織、施設等は
すべて架空のものです。